

原爆投下 75 周年の広島に身を置いて

湊 晶子 (広島女学院院長・学長)

広島・長崎に原子爆弾が投下されて 75 周年を迎えるこの年に、緑豊かに復興した広島で、孫のような学生たちに私の戦争体験を語ることができるとは私自身の人生設計の中には組みまれていませんでした。2014 年に 81 歳で広島女学院院長・学長に就任以来、毎年核廃絶の署名活動を松井一實広島市長、原爆記念館の方々、広島女学院高等学校の生徒たちと共に行ってきましたが、今年は新型コロナによりすべての行事を縮小した形でしか行うことはできません。

2018 年 11 月 23 日には広島女学院の卒業生であるサーロー節子さんをお招きし、広島女学院大学の講堂で 1000 人の出席者を得て核廃絶の講演会を開催いたしました。サーロー節子さんと私は同年齢で、お互いに爆撃から守られた命を「核廃絶と世界平和」のために捧げようと再確認いたしました。

戦時中神戸に住んで居りました私ども家族は、クリスチャン家族であったため迫害の対象となり闘いの日々を送りました。小学 6 年生だった私は教室の正面に飾られた二重橋の写真に遥拝することも、その横に安置された神棚への拍手もしなかったことから、教室の後ろに立たされました。私の右腰がノートでしたので、今でもそこをなでると神武天皇から今上天皇までの名前とモールス信号などがすらすらと出てきます。医者であった父が出征してからは、留守家族は都会から地方への疎開を余儀なくされ、千葉に移ったことにより教室に立たされることから解放されました。軍事工場化された千葉県立第一高等女学校で毎日朝早くから戦闘機のビス打ちをしました。原爆が投下された日の東京と千葉は、空からはカラスの集団のような小型戦闘機による機銃掃射でバタバタと撃ち殺され、海からは艦砲射撃による攻撃を受け町は壊滅的に破壊されました。私は屋根すれすれまで急降下しながら狙い撃ちしてきた操縦士と目が合ったのです。彼の目に涙が。その時「国と国は殺し合っている、人と人は必ず仲良くなれるはず」という思いが込み上げてきました。(ガラテヤの信徒への手紙 3 章 28 節)

広島と長崎に原子爆弾が投下され一瞬にして多くの尊い命が奪われました。戦争も末期状態の中で、私たち女学生に「従軍看護婦志願書」

が渡されたのです。私は傷ついた兵隊さんのために応募するつもりで自宅に持ち帰りましたが、父親役を務めていたクリスチャンの祖母に書類を破られました。「神様からいただいた命を今大切にする時です！」と。止めどなく涙が流れましたが、いつ死ぬかわからない日々の中でも毎朝4時に起きて聖書を読んで祈っていた祖母の一言には力強い説得力がありました。数日後戦争は終わったのです。

5代目のクリスチャンである私は、東京女子大学を卒業後、1956年フルブライト奨学生として敵国だったアメリカに留学し、ホイートン大学大学院、ハーバード大学神学部で「ローマ帝国におけるキリスト者と国家」について研究を深めました(湊晶子著『初代教会と現代』ヨベル社)。パウロとペテロの「キリスト者は国家に従うべきである」との言葉は、「国家に対する無条件服従」を意味しているのではなく、「国家が神に属するものまでも強要してきた時には、キリスト者は毅然として対決すべきである」という命令であることを確認し、私の小学校時代の対応が間違っていなかったことに納得致しました。

平和とは、「平和に生きる、平和を望む」という消極的なものではなく、積極的に犠牲を覚悟しつつ「つくり出す・実現する」(マタイによる福音書5章9節)ものであることを心に刻み、平和の実現のために残された生涯を生き抜きたいと、原爆の地広島で決意を新たにしています。